「基礎演習Ⅱ」における地域とグローバルの視点構築の試み
―アーネスト・サトウが注目した戦国山口とキリスト教の栄枯盛衰―

古別府　ひづる

要　約

「基礎演習Ⅱ」にて、学生と共に、明治維新の英国の外交官であったアーネスト・サトウによる140年前の英語の論文の翻訳を試みた。論文は、16世紀後半の戦国時代の山口の豪族とフランシスコ・サビエルを初めとするキリスト教の宣教師達との交流と盛衰について書かれたものである。且つ、その解釈を通し、絵入りの人物相関図の作成を行った。これらの活動より、学生達は、日本でのキリスト教布教に山口が重要な役割を果たしていたこと、そして、山口が世界とつながっていたことがわかった。また、山口への関心が深まり、さまざまな物事を山口に結び付けて考えるようになった。さらに、今後、気づいていない山口の価値を見出そうと思うようになった。即ち、活動が山口の価値を発見する姿勢を養う過程となったことがわかった。

構　成

1. 動機と目的
　1.1　国際文化学部文化創造学科の教育目標と「基礎演習Ⅱ」について
　1.2　学習目的
2. 方法と手続き
　2.1　資料
　2.2　期間と参加者
　2.3　活動計画
3. 活動の実際
　3.1　主要人物の抜粋
　3.2　補助資料
　3.3　人物相関図の作成
4. 成果の可視化
　4.1　翻訳
　4.2　人物相関図
　4.3　パーワ―ポイントの作成と口頭発表
　4.4　フィードバック
5. 分析と考察
　5.1　資料的価値
　5.2　自文化の発見
　　5.2.1　日本キリスト教布教の最初の拠点、山口
　　5.2.2　山口の価値
　5.3　統合的視点
　　5.3.1　内省の成長
　　5.3.2　山口の価値を伝える手段の意識化
6. まとめ
　今後の課題
注
引用文献

1. 動機と目的

1.1　国際文化学部文化創造学科の教育目標と「基礎演習Ⅱ」について

文化創造学科では、アドミッション・ポリシーの教育目標として以下を掲げている。

国際文化学部文化創造学科は、国際的な視点に立ち、地域の文学・歴史・芸術・生活などに関する理解と実習経験に基づき、地域の文化資源の価値や可能性の再発見・創造・発信を通して、地域の諸課題の解決に資する人材の育成を目的としている。

また、２年時に必修科目として履修する「基礎演習Ⅱ」の授業概要として以下のように述べている。

文化創造学科の教員が提供することのできる数多くの領域や方法のなかから、学科の専門科目での学びにとって必要なトピックについて演習形式で授業を行い、そのことを通じて、みずからの着想を発信するための基礎的な知識と技術を習得させることを目指す。

1.2　学習目的

１．動機と目的より、平成27年度後期「基礎演習Ⅱ」の学習目標に以下を掲げた。

①山口という地域と世界の歴史とのつながりを再発見する。
②英語の翻訳を試みる。
③言語と非言語の融合を目指し、成果を視覚化する。

即ち、国際、山口、歴史というキーワードと言語と非言語の総合的アプローチとして、1879年に発表されたアーネスト・サトウの英語の論文をリソースにすることにした。

アーネスト・メーソン・サトウ（1843-1929）は、幕末から維新にかけてイギリスの外交官・通訳として活躍し、また、日本研究の第一人者であった。日本に関する夥しい数の論文や日本語の辞書の編纂、会話教本等の日本語学習書も出版している。外交官としては、1867年に『英国策論』を発表し、江戸幕府から天皇を中心とした国家に大転換を遂げた明治維新への道筋を示した人物である。日本に25年間滞在し、西郷隆盛や伊藤博文、勝海舟とも交流があった。日本人と対等に付き合い、日本の文化と社会の中に深く分け入り、自在に日本語を使えた最初の外交官であったサトウの著作の中に、16世紀後半の山口に関する英語の論文があった。

16世紀後半の山口は、大内氏が全盛を極めた時代である。現代の日本では、明治維新の長州、山口の方に関心が向くかもしれないが、維新に活躍した英国の外交官が、大内氏とキリスト教の関係に注目しているのは興味深く、国と時代を超えた山口の新たな側面と豊かさに気付くことになるのではと考えた。

さらに、その解釈の視覚化として、人物相関図の作成を提案した。

2. 方法と手続き

2.1 資料

資料として用いたのは、アーネスト・サトウの以下の論文である。

'Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586', TASJ[1], 1879

タイトルを邦訳すれば、「1550年から1586年までの山口の教会の変遷」となるであろうか。

この論文は、サトウの多数の著作の中で、上述したが、山口が取り上げられており、また、西国随一の戦国大名と言われた大内義隆とイエズス会の創始者フランシスコ・サビエルとの邂逅で始まる。16世紀のヨーロッパの覇権国の一つであったポルトガルの世界的な海外進出と宗教史の歴史的大展開そして日本の戦国史とがシンクロしていること、さらに、140年前のサトウの原文より、サビエルを初めとした宣教師の日本におけるキリスト教布教の流れを、山口という視座で読む中で、山口が果たした役割や重要性を見出し、価値の再発見につながると考えた。

2.2 期間と参加者

参加者：2015年後期「基礎演習Ⅱ」の受講生
　　6名
期　間：2015年10月～2016年1月
　　週1コマ（90分）全15コマの授業

2.3 活動計画

第1回　課題設定・担当を決める。
第2～5回
①論文の翻訳を試みる。
②論文に登場する人物を抜き出し、人物の背景や対人関係を調べる。
第6回～10回
③サビエル側と大内側とに分けて人物相関図を作成する。
第11回から15回
④再度、論文を読み直し、解釈につなげる。
⑤パワーポイントを作成する。
⑥口頭発表を行う。

3. 活動の実際と成果

3.1 主要人物の抜粋

分担をして、英訳を試みたが、解読が困難であった為、論文の記された主要人物について、まず、調べてくることにした。主要人物とは以下であり、後に作成する人物相関図に反映させた。

大内義隆、陶晴賢、大内義長、大友宗麟、毛利元就、毛利隆元、吉川元春、小早川隆景、相良武任、毛利輝元　黒田官兵衛、フランシスコ・ザビエル、ロヨラ、フェルナンデス、トルレス、フロ

イス、アンジロー、ロウレンス、

3.2　補助資料

さらに、解読の補助資料として、日本語の文献である、『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』[2)]を講読した。特に、当該文献の231-275頁には、ザビエル一行が山口に辿りつくところから、ザビエルが山口を離れ、豊後に向かい日本を離れるまでのことが詳細に書かれており、論文の解読に役立った。

3.3　人物相関図の作成

さらに、理解を深めるために、3.1で取り上げた人物について、大内義隆とフランシスコ・ザビエルを中心にした人物相関図の作成を試みた。二人を中心にした理由は、2.1資料で述べたように、大内義隆とフランシスコ・サビエルとの邂逅で始まり、前者が、山口の統治者で、後者がイエズス会の創始者だからである。

人物相関図の作成のポイントとしては、人物を絵で描くこと、また、人物間の繋がりだけでなく、年代の流れと出来事が展開された場が見えるように工夫することを提案した。

4. 成果の可視化

4.1　翻訳

筆者と受講生６名が分担して、翻訳を試みた。その一例を以下に示す。表現の修正は極力行わず、そのまま記載した。尚、完訳できない者もいたが、その際は、要約という課題に代えた。

論文の概要としては、前置きに、アーネスト・サトウが偶然発見した原稿の複製が論文を執筆するきっかけであったことが書かれている。それは、1552年にキリスト教の宣教を認可した漢文の原稿の複製で、山口の周防の僧院か仏寺にいる宣教師宛のものだった。サトウは、行間のラテン語訳を見て、オリジナルの原稿の意味が正確に訳されていないのに気づき、正確な訳を試み、且つ、その歴史的背景の描写を試みたとある。

歴史的背景とは、フランシスコ・サビエルによる山口でのキリスト教の布教を端緒とする。フランシスコ・サビエルが山口に到着したのは1550年で、当時の山口は大内氏が支配し、サビエルは当主である義隆から布教の許可を得る。それから、豊後の大友義鎮に招かれ、豊後へ行く。その間に、山口では、陶晴賢の謀反が起こる。サビエル自身は、1551年には日本を去るが、この論文は、その後1587年の豊臣秀吉の伴天連追放令の前年の1586年までを、山口における大内氏や毛利氏の権力争いとキリスト教の布教の変遷に焦点を当て、描写し分析している。

ただし、本報告では、紙面の都合と「基礎演習Ⅱ」の実践報告であるという趣旨より、全ての訳文の掲載は割愛し、以下の骨子に相当する①から④の部分訳を載せることにする。（　）内はサトウの論文の頁を示す。

①当該論文を書くに至った経緯が語られている冒頭部分（p.131-135）の翻訳
②大内義長による「大道寺創建裁許状」（宣教の許可証）のラテン語訳と英訳及び日本語訳（p.140）
③大内義長以降の山口のキリスト教布教の様子と山口の支配者毛利についての翻訳（p.147-149）
④1586年以降の山口のキリスト教（p.155-156）についての翻訳

①当該論文を書くに至った経緯が語られている冒頭部分（p.131-135）の翻訳

（原文）

The part of Japanese history most fraught with personal interest for Europeans is the period, almost amounting to a century, which commenced with the discovery of the country by the Portuguese in 1542 and ended with their final expulsion in the year 1640. During this time an active commerce sprung up between Japan and the foremost of European states, which was the cause of the Japanese themselves becoming more enterprising in their foreign relations than at any previous epoch, and which also favoured in an eminent degree the introduction of Christianity. It must be a matter of profound regret to every one who is interested in the welfare of Japan, that the conversion of the inhabitants to the religion of Europe encountered such powerful hostile influences ; ［…］.

We know the story from the side of the missionaries,

variously interpreted by prejudiced adherents and enemies, but the Japanese tale has still to be told and impartially explained. It is of prime importance that we should become acquainted with the Japanese history of that period so far as it bears upon the rise and fall of Christianity, and in doing so we may perhaps learn some lessons that will be of use to us even at the present day ; [...] .

Putting aside Kiushiu for the present, though it ought properly to be treated first, I propose to sketch as briefly as possible, and omitting all names except those of the principal persons, the vicissitudes that befel the Church at Yamaguchi and the Japanese persons of influence in that part of the country during the first period of the progress of Christianity in Japan. The history of the general persecution has been so well narrated by M. Léon Pagès from the European sources, that its illustration from Japanese records will be comparatively easy when any one finds leisure to undertake the task. My authorities have been principally the letters of the missionaries on the one hand, in Latin and Italian translation, and for the Japanese part of the subject such works by native annalists as are easy of access and generally accepted as trustworthy.

In looking over a copy an old book entitled "Rerum a Societate Jesu in Oriente gestarum volumen," printed at Cologne in 1574 "apud Geruinum Calenium et haeredes Iohannis Quentel," I lighted upon a curious transcript, or supposed facsimile of what purports to be a copy of a Japanese grant made in 1552 to the Jesuit missionaries at Yamaguchi in Suhau of a monastery or Buddhist Temple. An interlinear Latin version is given, but as it does not exactly convey the meaning of the original document, and the latter itself is not easy to decipher, I have thought that it might be worth while to make a correct translation and also to reproduce in a legible form the text of this old and undoubtedly genuine document.

The mission at Yamaguchi was originally founded by St. Francis Xavier, whose first letter from there is dated on the 20th November 1550, and addressed to the Society of Jesus at Goa. He relates therein that after passing a year at Kagoshima, where he had arrived on the 15th August, 1549, making more than a hundred converts with the aid of Brother Paul (a converted Japanese who had been instructed in the Christian faith at the College of St. Paul in Goa), and studying the language, he left that city about the beginning of July, 1550, and proceeded to Hirado, then ruled by a prince named Matsura Takanobu. Here he and his companions made nearly a hundred more converts in a few days. Leaving Cosmo Torrez to take charge of the neophytes, he went on to Yamaguchi, with Joam Fernandez, a layman, but meeting there with very little success, he judged it better to continue his journey to the capital. But on arriving there, he found the city full of armed men, and in a state bordering on anarchy, which did not appear likely to favour his attempts to make proselytes, and the two missionaries therefore retraced their steps to Yamaguchi.

Xavier says that on returning to Yamaguchi he presented letters of credence and presents from the Portuguese Viceroy of India and the Bishop of Goa. Among these presents were a clock and a harpsichord, which though of little value, were highly appreciated by the King, as nothing of the kind had ever before been seen in his province. A considerable sum of money in silver and gold was offered in return for the presents, but Xavier declined to receive it, and begged instead for permission to preach Christianity, which was readily granted. A proclamation was published, declaring that the King approved of the introduction of the new religion, and granting to the people perfect liberty to embrace it, and an empty Buddhist monastery was assigned to the missionaries as a residence. Their operations were attended with great success. Five hundred converts were made in a couple of months, and further adhesion were being received every day at the time when Xavier wrote. We find him still at Yamaguchi on the 1st September, 1551, where he was joined by Cosmo Torrez about the 10th of that month, and leaving Torrez and Joam Fernandez in charge, he started shortly afterwards for Buñgo, whither he had been invited by the ruler Ohtomo Yoshishige.

（日本語訳）

日本の歴史の中で、西洋人に個人的な興味を最も抱かせる時代は、ほぼ一世紀に渡る時代、即ち、1542年のポルトガル人による発見に始まり、1640年の追放令に終わる時代である。それ以前のどの年代

よりも日本は、積極的に外国との関係を強め、また、キリスト教の導入を積極的に推し進めようとした。しかし、日本の人々の西欧の宗教への転換が敵意を生み出したこと、即ち、稀にみる最初の半世紀の成功の後、流れは逆流し、日本をキリスト教国から締め出し、今に至っていることは、日本の幸福に関心を持つ人々にとって、非常に残念なことであるにちがいない（中略）。

我々は、さまざまに翻訳された宣教師側からの話しか知らず、日本人側からの話も十分ではない。よって、まず、キリスト教の盛衰についてのその時代の日本の歴史を知ることが重要である。そうすることによって、現代においても役立つことがあるかもしれない。（中略）

今の九州[3]はさておき（最優先されるべきであろうが）、筆者は、日本のキリスト教に最初の進展に影響を与えた山口における教会の盛衰とそれに関わる主要な人物についてできるだけ手短に描くこととする。迫害の歴史については、レオン・パジェス[4]によって、ヨーロッパの資料から十分語られているので、日本の記録からそれを描写することは比較的簡単であろう。一方、筆者の場合、その拠り所は、何よりも宣教師によるラテン語とイタリア語訳の手紙であった。宣教師による手紙の方が、その種の日本に関しては、入りやすく一般的に信頼できる。　（中略）

1574年にケルンで印刷された「Oriente gestarum volumenのSocietate Jesuを再編成する」（“apud Geruinum Calenium et haeredes Iohannis Quentel,”）と題された古い本に目を通している時、筆者は、面白い原稿を偶然見つけた。それは、1552年の日本の許可の付与の写しで、山口の周防の僧院か仏寺にいるイエズス会の宣教師宛のものだった。行間にラテン語訳があったが、オリジナルの原稿の意味を正確に訳していなかったので、解読できにくかった。筆者は、正しい翻訳をして、読みやすい形に再生することに価値があると考えた。

山口での宣教は、フランシスコ・サビエルによって、初めてなされた。サビエルの最初の手紙の日付は、1550年11月20日で、ゴアのイエズス会宛のものであった。ザビエルはその中で以下のことを述べている。1549年８月15日に鹿児島に上陸し、そこでは、ブラザーパウロ（ゴアの聖パウロ学院でキリスト教に導かれて改宗した日本人）の助けで100人以上の改宗者を得て、言葉を学びながら１年間過ごした後、1550年７月に鹿児島を離れ、松浦隆信という藩主が治める平戸に向かった。ここで、サビエル達は、数日で100人以上の改宗者を得たとある。初学者の担当としてコスメ・デ・トルレスを平戸に残し、ザビエルは、平信者のジョアン・フェルナンデスと共に、山口に行った。しかし、そこでの収穫はほとんどなかったので、都への旅を続けた方が良いと、サビエルは判断した。しかし、都に着くと、武装した兵士が溢れ、境界も無秩序の中で、改宗者を得るための試みがうまくいくように思えなかった。それで、二人の宣教者は、山口に引き返した。（中略）

サビエルは、山口に戻った時に、インドのポルトガル総督とゴアの司祭から、信用状と贈り物を渡したと述べている。これらの贈り物の中には時計とハープシコードがあり、これはほとんど価値はなかったけれども、彼の地ではこれまでに見たことが無かったものだったので、君主から高く評価された。相当額の銀と金が贈り物の代償として申し出されたが、ザビエルはそれを受け取ることを拒否し、代わりにキリスト教の布教許可を求めた。そして、それは、すぐに認められた。君主が、新しい宗教の導入を承認し、宣教師達にそれを受け入れるための完全な自由が与えられ、そして、空き家の仏教修道院が宣教師に住居として割り当てられたと宣言された。彼らの活動は大きな成功を収めた。数ヶ月後に500人の改宗者が生まれ、ザビエルが手紙を書いている時には、さらに関心の高い人たちが毎日のようにやってきた。1551年９月１日時点には、サビエルは山口にいたが、10月10日にコスモ・ト・トルレスと合流し、トルレスレスとジョアン・フェルナンデスを残し、藩主大友義鎮の招きで豊後に向かった。

②大内義長による「大道寺創建裁許状」（宣教の許可証）のラテン語訳と英訳及び邦訳（p.140）

原文は、論文に添付されていたオリジナルの原稿を楷書で書き写した振り仮名つきの写しである。

（原文）

スハウノクニヨシキコホリヤマグチアガタ サイドウジコト
周防國吉敷郡山口縣大道寺事
ヨリセイイキライテウノソウタメブツバフセイリウノベキ
従西域来朝之僧為佛法紹隆可

サウケンスカノジカヲノヨシマカセセイバウノ ムネニトコロ
創建彼寺家之由任請望之旨所
セシムルサイキョノジヤウゴトシクダンニ
令裁許之状如件
テンブンニジフイチネンハチグフツニジフハチニチスハウノスケ ゴハン
天文廿一年八月廿八日周防介御判

（ラテン語訳）

Dux Regni de Zuo, Regni Nangati, Regni Bugen, Chicugen caqui, Regni Iuami, Regni Bungi, Regni Bichiyi, concessit Day i. magnum dogie i. aditum coeli patribus Occidentis qui venerunt ad declarandum legem faciendi sanctos iuxta ipsorum voluntatem ad finem vsq: mundi. is est locus positus intra Amangutium magnam vrbem, cum preuilegiis vt nemo possit occidi nec apprehendi in illo. Atque vt sit testatum meis successoribus do illis hoc diploma, vt nullo tempore eos deturbent ex hac possessione. Regni de Teybum, anno 21 ipsius octaui mensis vigesimo octauo die.

SVBSCRIPTIO

Dvx Daidiqui bozat

Forma sigillî

（サトウの日本語の原文からの英訳）

With respect to Daidauzhi（i.e. monastery of the great way） in Yamaguchi Agata, Yoshiki department, province of Suhau. This deed witnesses that I have given permission to the priests who have come to this country from the western regions, in accordance with their request and desire that they may found and erect a monastery and house in order to develop the law of Buddha.

28th day of the 8th month of the 21st year of Teñbuñ

Suhau no suke.

August Seal.

（サトウの英訳の筆者による日本語訳）

周防の国吉敷郡山口縣大道寺において、西域からこの国に来た僧達が仏法を広めるための僧院を建てるという要望に対し、その許可を与えることを証する。

天文21年８月21日

周防の介　証印

③大内義長以降の山口のキリスト教布教の様子と山口の支配者毛利についての翻訳（p.147-149）

（原文）

For eighteen years after the flight of Torrez from Yamaguchi, the Christians in that place were left without any resident priest to maintain them in the orthodox practice of their religion. A letter of Francesco Carrion of the year 1579 says that "there were two churches, one in the town of Yamaguchi itself, and another not far off, with 500 Christians, who had been deprived of the ministrations either of priests or lay-brothers, during a period of twenty-four or twenty-five years, with the exception of a passing visit from father Cabral, some five years before the date of the letter. He remained with them a few days, confessing them and animating them to perseverance, and he also baptized a few new converts. Of the older converts, many had been by Xavier, and others shortly afterwards by Torrez. Since the death of the younger brother of the King of Buñgo, the tyrants who ruled over the province had refused to allow any missionaries to reside there, but nevertheless, the Christians had not only adhered to their religion, but had even multiplied, bringing up their children in the same belief."

The tyrants here alluded to are Motonari and his two sons Takakage, given in adoption to the house of Kobayakaha, and Motoharu, who succeeded to the headship of the Kitsukaha family. Having successively got rid of Harukata and his puppet-king, Motonari proceeded to make himself possessor of all the dominions of the Ohochi, with the exception of Chikuzeñ and Buzeñ, which after some fighting remained in the hands of the Ohotomo and their vassals. He still continued to claim them as his own, and in the meantime made up for this loss by his acquisitions in the east and north, by which Bitsuchiu, Idzumo, Ihami, Hauki, Mimasaki, Biñgo, Bizeñ and Inaba were added to the three provinces of which he had previously made himself master, thus bringing the number of provinces over which he actually exercised or claimed authority up to thirteen. His eldest son, Takamoto, having died in 1563, shortly after his unsuccessful campaign in Buzen, he divided all his dominions between his two other sons, Motoharu and Takakage, giving the provinces

of the Sañiñdau, or north coast, to the former, and those of the Sañyaudau bordering on the Inland Sea to the latter, while to himself he reserved a voice in the general direction of war and diplomacy. In 1569 Motoharu and Takakage again invaded Kiushiu, and took the castle of Tachibana in Chikuzeñ, from which the 'king' of Buñgo in vain endeavoured to expel them. It was during this war that Ohochi Teruhiro was sent to invade Suhau and Nagato, so as to cut off the enemy's supplies of men and provisions, and it was owing to the absence of nearly all the Mouri troops in Kiushu that he was at first so successful, and was able to capture Yamaguchi. Finding himself in danger of losing his own dominions, in the attempt to conquer those of others, Motonari recalled his sons to expel the invader. Two years later he died, at the advanced age of seventy-five, having maintained his faculties to the last almost undiminished.

（日本語訳）

トルレスが山口を離れて後の18年の間、信者たちは、宗教の正当な慣行を守る聖職者のいない中に取り残された。1579年のフランシスコ・カリオンの手紙によると、山口とそれほど離れていないところの2か所に教会があり、500人の信者とともに、25年もの期間、手紙の日付より５年ほど前のカブラル神父の通過訪問を除いて、聖職者の司式が執り行われないままであった。カブラルは、告解を聞いたり励ましたりして数日間彼らと一緒にいた。彼もまたサビエルによって洗礼を受けた者で、他はトルレスによって洗礼を受けた者である。豊後の君主の弟が亡くなってから、その地を支配する暴君達は宣教師が常駐することを拒否した。しかし、それでも受洗者たちは自らの宗教を守り通すだけでなく、同じ信仰で子供たちを育て、むしろ信者は増えていた。

ここで触れられている暴君達とは、元就と、二人の息子、即ち、小早川家の養子となった隆景と吉川家の養子となった元春のことである。晴賢と操り人形であった君主を続けて追い払い、元就は筑前と豊前を除いた大内が持っていた領地の全支配者となった。それからいくつかの戦いの後、その領地は大友とその家臣のもとに残った。元就は、それでもなお自分の領地だと主張し続け、東と北で受けた損害をそれで埋めた。それにより、主権をふるっていた備中、出雲、石見、美作、備後、備前、因幡が三つの支配地域に加えられた。このようにして、彼の権限の及ぶ地域の数は13にまで達した。元就の長男の隆元が、豊前での従軍の失敗の直後の1563年に亡くなり、全支配権を二人の息子である元春と隆景に分け与えた。彼が戦争と外交の指揮への発言権を確保する間、前者には北に海岸のある山陰道を、後者には島と海に接する山陽道を与えた。1569年に元春と隆景は再び九州に侵入し、筑前で橘城を乗っ取る。豊後の君主は彼らをそこから追い出そうとしたが失敗に終わった。周防と長門に侵攻するために大内輝弘が送られたのは、この悲哀の最中であった。結果、敵の人と物資の供給を止めることができた。彼が山口を押さえることに成功したのは、九州にほとんど毛利の軍隊がいなかったためであった。元就は自身の領地を失う危険性に晒されていることに気づき、他者を征服する企ての中で、侵入者を追い出すために元就は息子を呼び戻した。そして二年後に75歳で亡くなった。彼の能力は最後までほとんど衰えなかったと言われている。

④1586年以降の山口のキリスト教（p.155-156）

（原文）

There is little more to add concerning the fortunes of the church at Yamaguchi. After the reädmission of the Jesuits to the dominions of the Mouri in 1586 it flourished exceedingly, but from the time when Christianity was proscribed by Hideyoshi, and the missionaries were all ordered to withdraw from Japan, it became involved in the general persecution, and its subsequent history, not being affected by the disposition of the ruler Yamaguchi, ceases to derive any light from a study of the internal political affaires of the Japanese people.

（日本語訳）

山口の教会のその後について少し付け加えておこう。1586年に毛利の支配下にイエズス会が再建された後、教会は非常に栄えた。しかし、秀吉によりキリスト教が禁止され、宣教師の追放令が出てから、迫害の歴史に巻き込まれた。その後の山口のキリスト教の歴史は、山口の支配者の処遇の

影響を受けることなく、内政の事情の研究からいかなる光も引き出されていない。

4.2　人物相関図

翻訳を可視化するために人物相関図を作成した。

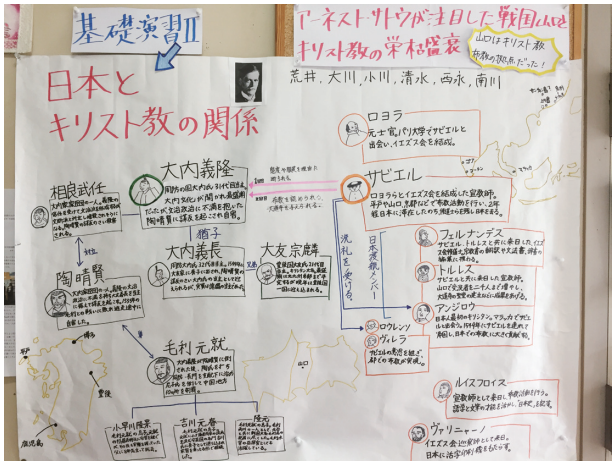

写真１．人物相関図の全体図

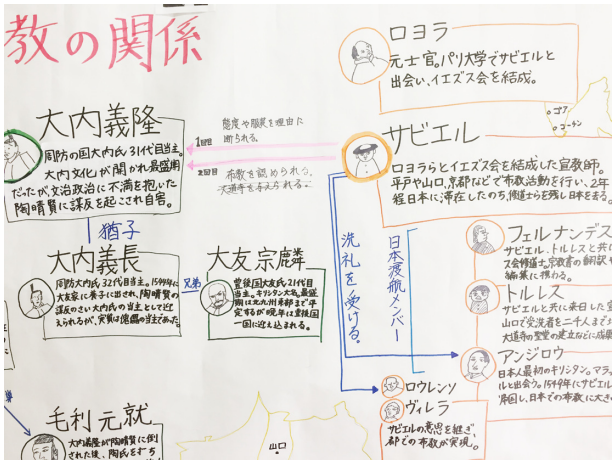

写真２．人物相関図の拡大図

4.3　パーワーポイントの作成と口頭発表

「基礎演習Ⅱ」の活動についてパーワーポイントを用いて口頭発表を行った。

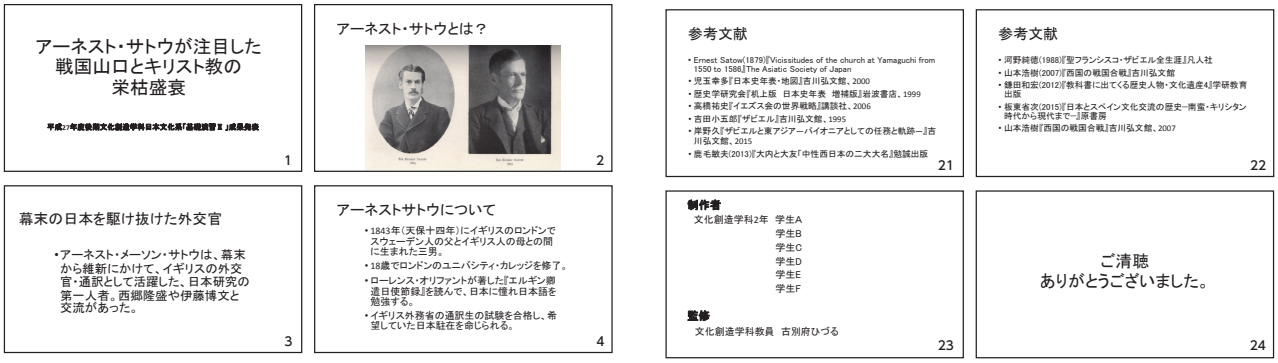

図1．パワーポイントのスライド

4.4　フィードバック

「基礎演習Ⅱ」が終了して半年後に、フィードバックを行った。半年後に行った理由は、内在化の深化を考慮したためである。受講生６名より３名のフィードバックが得られた（表１参照）。

5. 分析と考察

5.1　資料的価値

キリスト教が日本に根付く過程を、その時代の有数の豪族の権力争いとのからみで語られたものは、その後のキリスト教迫害の歴史ほど、一般的に知られていない。しかも、約140年前の日本で出版されたという意味で、サトウの英語による当該論文が、最初に書かれたものではないかと思われる。とりわけ、「大道寺創建裁許状」のラテン語訳をサトウが英訳した中にキリスト教を仏教の一派だと大内義長が見做しているところは興味深い。つまり、当時、キリスト教という認識がなかったことが窺える。

奥正敬（2011）は、『コインブラ版書簡集』[5]という布教が始まって早い時期にポルトガルで印刷されたキリスト教に関する書簡集に、この「大道寺創建裁許状」が掲載されており、単語ごとに不正確ながらポルトガル語の意味が付与されていると述べている。

サビエル達を送り出した国がポルトガルであり、また、当時の知識人にはラテン語の素養があったことより、双方の翻訳がなされたことが推測できる。サトウは、当該論文でラテン語の不正確さを指摘していた。ラテン語と英語と日本語に堪能であったサトウだからこそ指摘できたわけであるが、しかしながら、何故、サトウは、キリシタン研究を行ったのだろうかという疑問が浮かんでくる。サトウが当該論文を発表したのは1878年で、横浜開港資料館（2001）には、その２年前の1876年４月に、賜暇休暇でいたパリで、レオン・パジェスからキリシタン研究の話を聴き、1888年には、16世紀末から17世紀初めまでに日本においてイエズス会が刊行したものを書誌としてまとめた、*The Jesuit Mission Press in Japan*（『日本耶蘇会刊行書誌』）を私家版で出版している。また、上述の横浜開港資料館（2001）にはサトウは、非国教徒でプロテスタントである厳格なルーテル派の家で育ったが、サトウ自身が自らの意志で英国国教会教徒になったのは、1888年の45歳の時とある。これらより、英国国教会での堅信礼を受けるまでの10年余りの間に、キリスト教への関心を深めている様子が窺える。その理由についてはまた、稿をあらため考えてみたい。

サトウのこの一連の研究が後の新村出[6]のキリシタン資料の発見につながっていることからも、今回の翻訳の試みは、資料としての価値があると思われる。

5.2　自文化の発見

5.2.1 日本のキリスト教布教の最初の拠点、山口

サトウの論文には、サビエルは、1550年12月にミヤコであった京都に行った後、山口に戻り、1551年４月から９月まで半年間山口に滞在し、その後豊後に渡り、11月に豊後（日本）を離れる７か月間で、2000人の信徒を持つに至ったとある（p. 146）。サビエル自身の日本滞在の期間は、２年３か月であったが、論文によると、サビエルが山口に来た1550年から、毛利元就の孫、輝元がキリスト教を受け入れる1586年（秀吉の禁教令の１年前）までの35年間、繁栄と衰退を繰り返しながらも、弟子たちはキリスト教の明かりを灯し続けたとある。（p. 155）つまり、山口は、日本のキリスト教布教の最初の拠点であったと言える。では、どうして山口が拠点となりえたのか。パワーポイントの発表（図１）にもあるように、応仁の乱などで荒廃した京都から撤退するサビエル達が、布教の地として選ぶほどの国としての秩序と繁栄があったこと、大内氏をはじめ重臣達は信者にならず、それ以外の人々が信者になったとは言え、新しく珍しいものへの関心があったこと、そして反感があっても討論が行われる程の土壌があったことが考えられる。即ち、キリスト教を受け入れる器があったと言える。

5.2.2　山口の価値

フィードバック（表１）より、学生Ａは、「論文を解読していく中で、文化の中心である京都ではなく、山口が布教の中心として選ばれたことは、その時代の状況や勢力関係などがかかわっており、面白いと思った。そこから、山

表1. 2015後期「基礎演習Ⅱ」フィードバック

問：山口の再認識という視点から、どのような気づきがあったか。

	(学生A)		(学生B)		(学生C)	
作業名	担当	気づき	担当	気づき	担当	気づき
翻訳	アーネストサトウの論文を翻訳し、内容の把握し、そこから山口を客観的に見つめ直した。	今までは山口には何もないと思っていたが、アーネストサトウの論文を読んで、日本でのキリスト教の布教に、山口が歴史的に重要な役割を果たしているということがわかり、非常に驚いた。その一方で、もっと山口について知りたいとも思った。	山口の寺とキリスト教に関して	山口県とキリスト教とに深い関わりがあるということに気づくことができ、同時に長い歴史も感じることができた。数百年前から、山口は世界とつながっていたのだと感じた。	アーネストサトウが書いた論文において、担当個所の翻訳をした。そしてその中に出てきた日本の大名や、宣教師たちなどについて個人で調べた。	文中にいくつか山口の大名の名前が出てきたり、都であった京都が当時退廃しており、一度都へ行ったザビエルらが、布教を断られた山口の地へもう一度戻ったということから、日本のキリスト教布教に山口が大きく関わっていたことや、布教に有益であったということが分かった。
人物相関図の作成	アーネストサトウの論文から、重要な人物たちの関係図を作成した。	キリスト教に関係する論文だったので、海外の人物が登場するのはわかっていたが、思ったよりも日本の偉人達、特に山口の大内氏がキリスト教に興味を示していたということは、新しい発見であった。		完成した相関図を見ると、数百年前の説明図にもかかわらず、山口や九州だけでなく、ヨーロッパの地図まで含まれており、それだけ山口は世界と関わりが深かったのだと感じた。	相関図の作成では重要な人物の絵をほとんど自らの想像した姿で描いた。また、私は主に宣教師側のことについて調べていたので、宣教師たちの人物関係の確認や人物の説明を考えたりするなどした。	キリスト教の布教に際し、当時の山口の大名であった大内義隆の重要性、また山口という地の重要性を、整理し直したことで再確認することができた。山口で布教を許されるまで、またその後も様々な宣教師たちがいるので、誰を載せるか考えるのが難しかった。
パワーポイント作成	パワーポイントを作成し、論文から分かったこと、そこから推測されることをまとめた。	論文を解読していく中で、文化の中心である京都ではなく、山口が布教の中心として選ばれたことは、その時代の状況や勢力関係などがかかわっており、面白いと思った。そこから、山口がいかに重要な役割を担っていたかということが実感できた。		普段は見ないような角度から山口県を見ることができる、良い機会になったのではないだろうか。また、普段何気なく生活している山口市のことを考え、掘り下げることで、より山口県に親しみを持つことができたように思われる。	私はザビエルたちが日本に来るまでの簡単な説明と、ザビエルが日本に来てからの足跡について説明した。	日本に来るまでの説明とザビエルが日本を出るまでの説明を担当したので、一つの流れの中で捉えることができ、より山口という地の重要さ、その当時の、利害も気的とはいえ、様々なものを受け入れる器の大きさと繁栄を実感した。
口頭発表	関係図とパワーポイントを用い、約15分間の口頭発表を行った。	私は当日参加することが出来なかったが、口頭発表に参加してくれた友人から、山口が歴史的に重要な場所であることが再認識できたという言葉をもらい、改めて山口の魅力を再認識した。	口頭発表	緊張したが、聞き手にとっても興味深い内容であったように思われる。山口が日本におけるキリスト教布教の拠点であったという点をアピールポイントとし、より山口県や山口市を広く紹介できないかと思った。	卒論発表後の口頭発表でも同じ箇所を担当した。図を上手く用いることが出来た。	口頭での発表に加えて、図も用いることで、より分かりやすく伝えることが出来ることがわかった。特に日本に来るまでにザビエルらが通った地を示せたのはよかったと思う。やはり、社会的背景を考えながら、全体的な流れの中で捉える事が重要であり、人に山口が持つ価値を伝える時にも有効だと感じた。

問：活動前と活動後にどのような意識の変化があったか。

	活動前	活動後	活動前	活動後	活動前	活動後
意識変化	山口がそれほど重要な場所とは知らず、軽視していた部分もあったと思う。	アーネストサトウの論文を読んで、山口が歴史的に見て重要な役割を担っていたことを知り、山口に興味も出て、誇りにも思うことができた。最終的に、山口についてのより興味が出てきた。様々な物事を山口に結びつけて考えるようにもなった。	山口県とキリスト教が多少の関わりを持つということは漠然と知っていた。しかし、わざわざ人前で発表するほどのことではないと思っていた。	実際に英文を訳していくなかで、想像以上に山口県とキリスト教との間には深い関わりがあり、そうなるまでに先人が多大なる努力や労力を注いできたのだということを実感した。せっかく山口で生活しているのだから、関連する地域資料や場所に触れてみようと思った。また、思っていた以上に興味を持ってもらえて、個人的により深めていきたいとも思った。	この演習をするまでは、キリスト教布教に対して山口が深い関りを持っていたことは知らず、山口は数多くの総理大臣を出している県である、歴史的な建造物が多いなどという表面的な理解しかなかった。また、地域において過去どのような歴史があり、そこからどんな価値を見出せるかという視点を持っていなかったと思う。	しかしこの活動をしてから、宣教師達が日本に来るまでも、そして来てからも、様々な困難や物語があり、また日本を巡る中で当時の京都が退廃していたことや、僧の男色の問題、支配階級の武士という存在の有無など様々な背景がありながらも、結果山口という地がキリスト教の安定した布教に貢献するに最も値するものであったという事実を学ぶことで、山口の表面的なものだけでない価値を知ることが出来、今後もそういった私たちが気づいていないその地域の価値というものを見出そうとする意識を持つことができるようになったと思う。

口がいかに重要な役割を担っていたかということが実感できた。」とあり、歴史的展開からの山口への興味が生じているのがわかる。また、学生Bは、「普段は見ないような角度から山口県を見ることができる、良い機会になったのではないだろうか。また、普段何気なく生活している山口市のことを考え、掘り下げることで、より山口県に親しみを持つことができたように思われる。」と山口への親しみに言及している。さらに、活動後の意識変化に、学生Bは、「実際に英文を訳していくなかで、想像以上に山口県とキリスト教との間には深い関わりがあり、そうなるまでに先人が多大なる努力や労力を注いできたのだということを実感した。」と述べ、一面的ではない山口の価値に気付いている。

活動を通して、山口への興味や親近感が生まれ、山口と異文化とのつながりを通時的にとらえ、魅力の再認識があったことが窺える。

5.3　統合的視点

自文化の発見をさらに発展させた段階として、以下の気づきが挙げられる。

5.3.1 内省の成長

フィードバックより、学生Aは、「様々な物事を山口に結びつけて考えるようにもなった。」とあり、学生Cは、「しかしこの活動をしてから、宣教師達が日本に来るまでも、そして来てからも、様々な困難や物語があり、また日本を巡る中で当時の京都が退廃していたことや、僧の男色の問題、支配階級の武士という存在の有無など様々な背景がありながらも、結果、山口という地がキリスト教の安定した布教に貢献するに最も値するものであったという事実を学ぶことで、山口の表面的なものだけでない価値を知ることが出来、今後もそういった私たちが気づいていないその地域の価値というものを見出そうとする意識を持つことができるようになったと思う。」にあるように、活動が山口の価値を見出そうという姿勢を養う過程になったということがわかる。活動を総合的に振り返るというメタ的な視点で捉えており、更なる次の段階に進んだ学びの習得を感じ取ることができる。

5.3.2 山口の価値を伝える手段の意識化

学生Bは、「緊張したが、聞き手にとっても興味深い内容であったように思われる。山口が日本におけるキリスト教布教の拠点であったという点をアピールポイントとし、より山口県や山口市を広く紹介できないかと思った。」また、学生Cは、口頭発表の気づきで、「やはり、社会的背景を考えながら、全体的な流れの中で捉える事が重要であり、人に山口が持つ価値を伝える時にも有効だと感じた。」と述べている。このような時代の社会背景を探る作業が学生たちの学びを深めることがわかるとともに、山口の価値を伝える手段が意識化され、行動につなげようという姿勢に繋がると言える。

6.　まとめ

以上、アーネスト・サトウの論文の翻訳という「基礎演習Ⅱ」の活動の成果として、以下のようにまとめられる。

1）16世紀後半の山口の状況、即ち、文化と勢力と人間力の優れた要因が重なり、山口は、日本のキリスト教を受け入れる器を形成し、宗教史に残るキリスト教の素地を生み出したことがわかった。さらに、人物相関図として、それらの要因を可視化した。

2）翻訳の資料的価値を検討した。

3）学生が山口の価値をどのように認識し、そして内省を深化させたかを示し、学生の成長を促すことができた。

今後の課題

アーネスト・サトウの論文の全訳を稿を改めて掲載したい。また、学生たちの成果を、学外に知らせるため、電子ブックなどでの公開の可能性を探りたい。

注

1）1878年11月27日に日本アジア協会でサトウが発表したもので、TASJは、The Transactions of the Asiatic Society of Japan（『日本アジア協会紀要』）の略語である。日本アジア協会には、ヘボンやチェンバレン、ラフカディオ・ハーンなどが会員として名を連ねていた。

2）河野純徳（1988）『聖フランシスコ・ザビエル

全生涯』平凡社。

3）1870年代の九州ということになろう。

4）Léon Pagès（1814-1886年）はパリ生まれのフランス人外交官でフランスにおける草創期の日本史家。日本キリスト教史にも力を注ぎ、1862年に『日本二十六聖人殉教記』を、1869 - 1870年に『日本帝国史』の第3巻に当たる『日本キリシタン宗門史』と付編『史料集』を、1873年には『日本キリシタン迫害と日本遣欧使節記』を刊行した。

5）フランシスコ・ザビエルが日本で布教を始めた1549年から1566年までの日本イエズス会書簡集

6）（しんむらいずる）（1876-1967）日本の言語学者、文献学者。京都大学教授・名誉教授で、ソシュールの言語学の受容やキリシタン語の資料研究などを行った日本人の草分けである。特に、アーネスト・サトウが*The Jesuit Mission Press in Japan.* 1591-1610（1888）で文禄旧訳「伊曽保物語（天草本）」が大英博物館に所蔵されていることを発表した後、新村出は、英国留学中、これを手写し、ローマ字を漢字仮名交じり文に翻して、明治43年『芸文』に発表したとされている。

引用文献

(1) Ernest Satow（1879）. Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586. *TASJ 1*, 131–156

(2) Ernest Satow（1888）*The Jesuit Mission Press in Japan.1591–1610.* London：Privately Printed, 1888

(3) 奥正敬（2011）「『コインブラ版書簡集』で紹介された「大道寺創建裁許状」の話」『GAIDAI BIBLIOTHECA（図書館報）』第192号 京都外国語大学付属図書館

(4) 河野純徳（1988）『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』平凡社

(5) 横浜開港資料館（2001）『図説　アーネスト・サトウ―幕末維新のイギリス外交官―』有隣堂, 122

Attempts to Build Regional and Global Viewpoints in the "Basic Studies Seminar II" – Ernest Satow's Focus on the Sengoku (Warring State period) Yamaguchi and the Rise and Fall of Christianity

Hizuru Furubeppu

The purpose of this report is to rediscover the connection between the Yamaguchi region and the history of the world through the activities of "Basic Studies Seminar II".

We attempted to translate English papers written 140 years ago by Ernest Satow who was a British diplomat in the Meiji Restoration. The papers concerned the rise and fall of exchanges between Christian missionaries such as Francisco Xavier and the Yamaguchi clans of the Sengoku period in the latter half of the 16th century. Furthermore, through this interpretation, we made the a people correlation diagram with pictures.

Through this research, we discovered that Yamaguchi played an important role in the propagation of Christianity in Japan at the time and that Yamaguchi was connected with the world. We became more interest and began to think about the connection of various things to Yamaguchi. Furthermore, we became interested in finding out more in the future about the undiscovered value of Yamaguchi.